# スペースホームシック!?

DOJIN
R18
成人向け
18歳未満の
購入・閲覧禁止



# chapter:1

「……トイトイはさみしい。スペースホームシックだ」

トイトイのいつも通りの調子な声色からは
想像のつかない内容に、ナナツノ・ツミレは一瞬聞き違いを疑った。

「え、そうなの？」

「……うん」

「そうなのね～～♡」

急に甘い声を出されたのでトイトイは反射的に辟易とした顔をする。

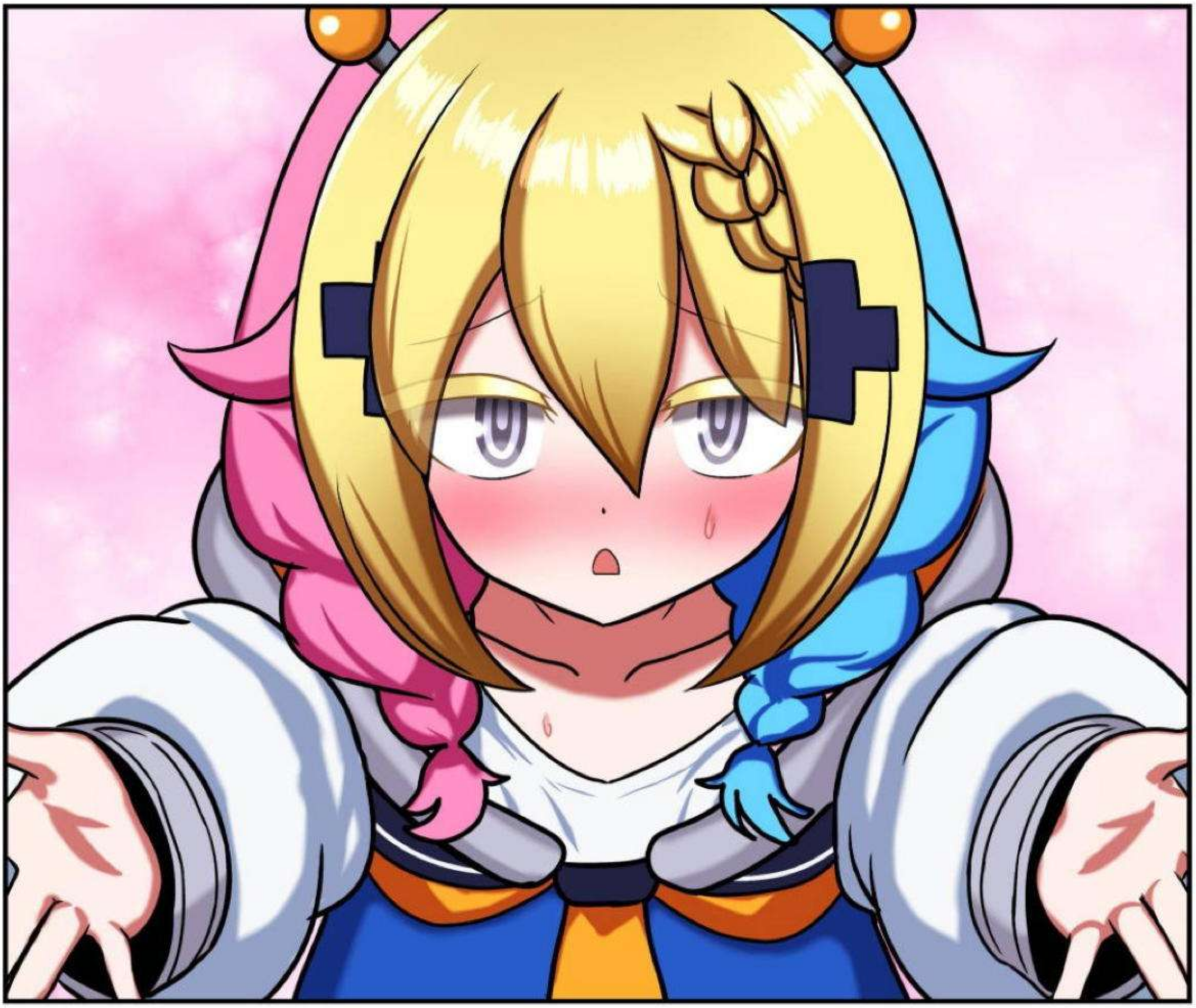
「……っ」

「こらこら、そんな顔しないの。さみしいんでしょ？」

「……うん」

「はい、よしよし……」

今までで一番従順でおとなしい。本当に淋しいのだろう。
ツミレは自分の内側に母性が膨れ上がってきているのを感じた。





# chapter:2

「安心感を得るためにはね、肌と肌のふれあいが重要なの。」

「そうなのか？」

「そうそう！だからね、キスすることも大事なの。」

「えっ？地球だとちゅーすると子供ができるんじゃないのか？
責任取れないぞ？」

「そんなわけないじゃない。意外とうぶなのねー……うふふ。」

「うっ……スペースエンバラシングだ……」

トイトイは赤面した。
ちなみに宇宙級に恥ずかしい、の意味である。

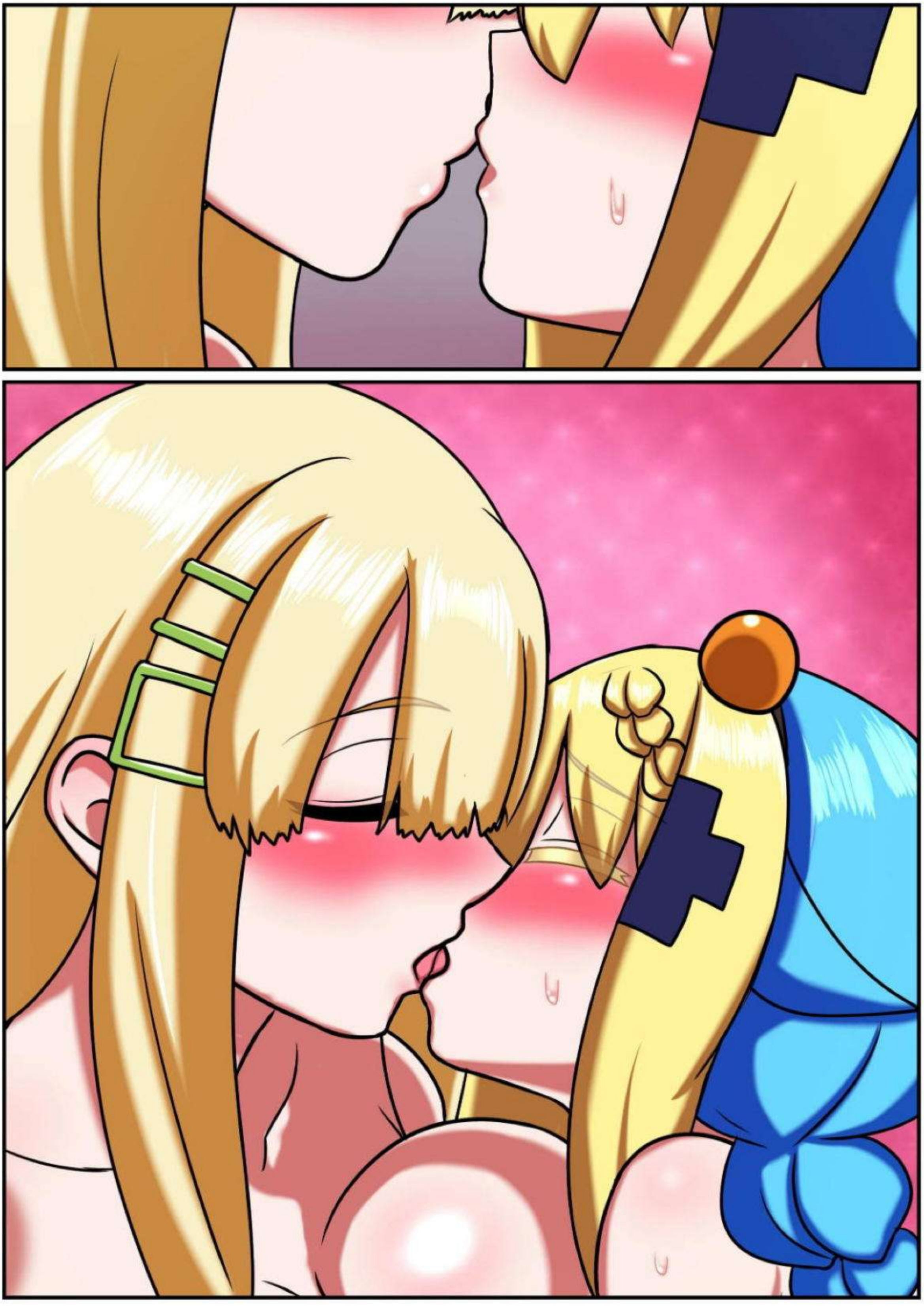
「うふふ、かわいいわ……。それじゃいくわよ……んっ」

「……んっ……」

そうして二人は唇を重ねる。

「……っ……んっ……」

顔が赤くなっている感じがする。鼓動が早まるのを感じる。
二人の気持ちは、どんどん高ぶっていく。



# chapter:3

「……トイトイは……おっぱいを所望する」

その言葉を聞いて、ツミレの胸がじんじんと疼き始める。
呼吸も少し乱れ、言葉も少し乱れていく。

「……あらあら、素直で……かわいいわ♡」

いつも通りの態度で取り繕ってみても、興奮と羞恥心が隠しきれない。
ツミレは顔を紅潮させながら、服を脱いでいく。

「……はい、どうぞ♡」

程なくして、ツミレの豊かに実った乳房が顕になる。
トイトイはたまらずノーモーションでしゃぶりついた。

「……んっ、んっ……」

「……うふふ……そんなに慌てなくてもおっぱいは逃げないわよ。」

「……んっ……だって……」

トイトイは己の行為をすこし恥じたが、それでも止まれない。
ツミレをより激しく求め始めていた。。



# chapter:4

「んっ、ふっ……もっと……もっと……」

トイトイは、満たされていくどころか
どんどん飢えていくような気持ちになっていた。
その結果、ただひたすらツミレの乳房にしゃぶりついて
上目遣いでもっと欲しいと懇願していた。

「もう、欲しがりさんね。これなら、どうかしら？」

ツミレはその指をトイトイの陰部に伸ばし、愛撫し始めた。

「ぐ、ぶ、あっ……」

痺れるような快感にトイトイの体が跳ねる
勢いで一瞬乳房から離れて、不格好な声を上げた。

「どう？気持ちいでしょ……」

「あっ、はっ……んぁ……」

ビリビリと頭の中を電流が流れて、思考がまとまらない。
もっと気持ちよくなりたい。と、シンプルな欲求が支配する。

「えいっ♡」

ツミレはその乳房ごと、ぎゅう、と体を密着させてきた。

「――――――――――っっ!?」

トイトイは声にならない喘ぎ声を上げて、体を震わせた。



# chapter:5

「もっと、気持ちよくなりたい……」

トイトイからついて出た言葉はそれだった。

「じゃあ、次はこうしましょうか。」

トイトイの体をコントロールしながらツミレは正常位の体位をとった。
お互いの陰部の位置をじっくりと合わせ、次の行為の準備を行う。

「これは……？」

「貝合わせ、っていうのよ。きっとすごく気持ちいいわ……」

そうして、お互いの「貝」を擦り始める。
「貝」は先程までの行為で
お互いじっとりと濡れている。
ローションのように滑らかにお互いを刺激する。

「ひうっ！あっ、やっ！」

トイトイは自分でも出したことの無い
甘ったるい声にびっくりしながらも快楽に溺れていく。

「はっ、はっ、はっ……」

ツミレはそんなトイトイの様子を見て、興奮を高めていく。



# chapter:6

「あっ、やぁっ、あんっ、ああっ……！」

トイトイはほぼ何も考えられていない
快楽に飲まれて脊椎反射が殆どを占めている。

「はっ……はっ……もうイキそう？」

ツミレはいつの間にか馬乗りになっていた
すっかり快楽に負けて獣と化している。

「いく……いく？わからない……けど……おっ」

ヒートアップした行為はその速度を際限なく上げていく。
光速まで到達するのではないかと錯覚するほどに。
しかし、終わりはもう来ようとしていた。

「わたし……イクっ……」

「トイトイ……イク……？」

もう余裕なんて無い、絶頂のカウントダウンはミリ秒刻み。
下腹部の底から、快楽が溢れ出ていく。

「――――――――――――――――――――――――――――――っ！」

「っ！！！あ、あ、あ……あー……」

トイトイには、気絶しそうな程の余韻が溢れ。
ツミレにはこの上ない至福の時間が流れていた。



# chapter:7

数刻の後。二人は快楽の余韻を楽しんでいた。

「はぁ……はぁ……」

「気持ちよかったかしら？」

「……うん」

「満足したかしら？」

「……うん。ツミレはどうなんだ」

「わたし？大満足よ♡」

トイトイにとって、いつもは嫌だったはずの
その笑顔は
今は銀河系の輝きより、眩しく見えた。

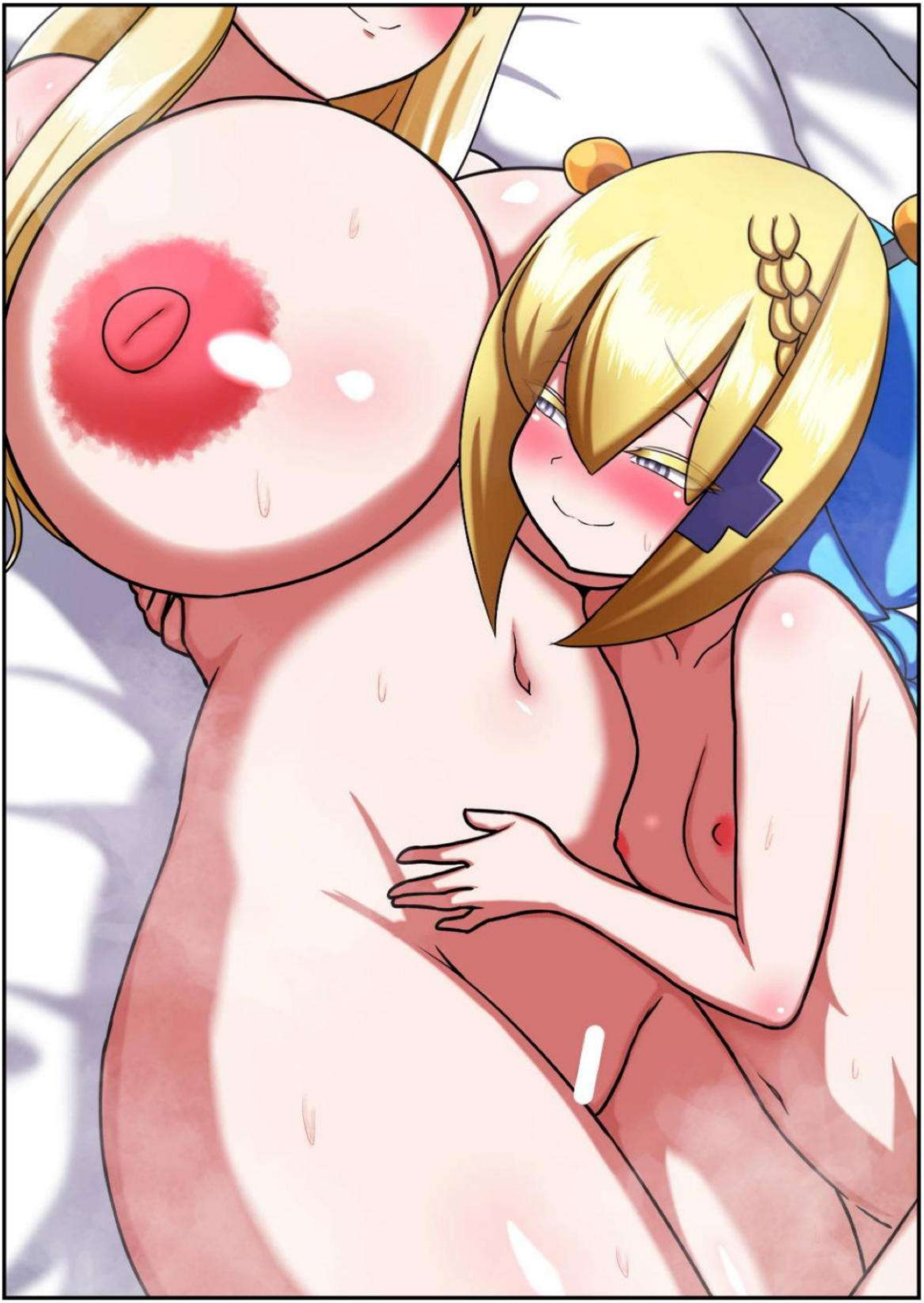
「……トイトイはまたさみしくなったらコレを所望する」

ツミレにとって、いつもと変わらないその顔は、我が子かのように
愛おしく見えた。

「いつでも待ってるわ♡」

明日から、またいつもの日常が始まるのだろうが
お互い、今日このことを忘れはしないだろう。

――――そのうち、二人の関係が変わったという噂が立ち始め
否定もできずに酷く恥ずかしくなる時が来るのだが
それはまた別のお話。



# スペースホームシック!?